

金槐集

全

特別

イ 4

3159

B 5

0 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4

14
3159
B5

金槐集卷之上
春

正月一日よめる

けさみ事は山を覆れて久かみの天の原より春はまたさう

よる春のころをよめる

九重の雲井に春そ立ちぬらう大内山よおたなをひく

故々立春

羽衣たそらをむくればそみつのさのよりゆきのまよまきはまた

春のけしめよ雪の降をよめる

かきとらうなを降雪のまきけしはまをさもあらの谷の草を
まよそはまをまつまんとさめをほくおとさしとえす雪のまはれは
まのけしめれした



こちをひよすまをくく水で楸生るか山陰は終るそなく
山をたにおははすく一雪をれ晴すつあのみかやうりまた
屏風の跨よまられ山よさあれるところを讀る
松の影れはまをみまはまらるこののももまのをそやう
あつらよつむとこころ

まらゆの飛尺のせちけりとやむりかふまよあま
雪年れわゆるとくしりや

若菜つむ衣手ぬきて片雲のありたの事はあはせそ
梅のまらるをよめる

梅かえに氷まるおねやとけやんほあぬあめのむら
葉れり梅の末るをよほがらるふ

梅のはるるははそれとわぬまをゆよみわけて
あつら

ひめのこころをよめる

おろよの梅の初む咲くもつ雪もなとあまな
花のあひりの雪とくしりや

まらりてまつ候やれ梅のまらるわななうみ雪をそま
梅むれは匂ふと云事ふて讀せ何一決よ

むめつを愛れ枕まよとくしりや待たすまの山風
梅香董衣

梅うは我衣手よ白ひりねむしるまのほうれ
梅れそなまよめる

まらりて吹とあれと梅のまらる雪るあうけりく雪
春の歌

早蕨のもえしつるまよぬめりて野を雪のあはしたるしり

かすみをよめる

三冬ついで春もきぬ水も春柳のついで春もあけくさし
かげうた春の末水も春もあけくさし山は立満より
かうたて春も春もあけくさし波根の木をよめるに春たるは

柳をよめる

春も水も春もあけくさし山は立満の杜れ春柳の系
雨後の柳をよめる

深みより深みかゆる春柳の系もあけくさし春もあけくさし
水たまる池の坡の柳をよめる

柳

春柳の系もあけくさし山は立満の杜れ春柳の系
雨もあけくさし春柳の系もあけくさし

春をよめる

古寺のくち木の梅も春もあけくさし山は立満の杜れ
雨後の春をよめる

梅を厭雨

我々の梅も春もあけくさし山は立満の杜れ
故の梅も

春も水も春もあけくさし山は立満の杜れ
古の梅も

古御春月をよめる

故の梅も春もあけくさし山は立満の杜れ
古御春月をよめる

たれ何ぞ淫をのむらん ちよれ吉野のみやのまゝのまれ日

春月

なつむれを衣てかよむ 久方の月のま故のまの秋のそら

梅華をよめる

紅花れ心重のこし 梅咲くを 初もあはれなきてはるん
雪ははくくるあはれそ 梅のまよこし のこあなをうひるねい
てうとそこあひしはくたに 梅のころこぬるまで 夫こちやまぬ
わの袖よ香をうたに 強せむれむあそ 子ぬるまこいみよ
梅のころこ 咲る 盛をぬれまよし 下くせる 花をまそかなをい

雪子をよ

あをよより たつむれの山を 雪子をいくる 時そ夫しこはに

山をよ

清茅京ゆきをよむ ね野へよ出て 故里人も 董つみく

雪す

古園の屋上れ 雑子初なく 妻よこひつ 常音息しそ
をばか妻恋あひし 雪す 妻の野よあやる 雑子の初なくそ

名所梅

をよにゆき 雪の梅 咲くを 山の麓よかろし 雪
よをよ 雪の梅

雪中梅

あつちやたをよめる 雪をよむ 夕ある 雪よまをよめる
雪のよと立かろれそ 山はくろむ 雪の雪よそ けちぬるこいれ
けあそやい 雪よまをよむ 雪の雪のやとくを 我よかやらん

山をよむ

ぬ 道とをみけは越ゆるを。山隈くまればやうを我よかたなむ

春山月

風はく遠の山を吹きてこころは曇るまのよれつき
原れの鳥は旅人あり、むの下のあそぶ

木れいのむのした以取うして我衣てた月そ列ぬる
木れもたに下うとすくし探むちちちちけけ旅なるた
このもよやうなふれさかきふの我衣てたむておつ
いまはとそひ移し探さうお木のもよひ救ぬて
山影よむんころころ

時の中とおきていしを山をよむみくしとるふかきくし
むちちちところに影をよむ

雁こねのゆる翅もゆるくむをうらむまのしんを

中てころまの四日あまうのけしやあそびおむるのそ
くよ立出て夕暮の空をなめて一人をうら雁の
なくをよめてよめる

なあつおともも懸し雁ゆるくかみの夕れのそら
ゆみあそびをせしよりの山のそとつて山人
のむみくふとこころはあめ

みまの山のやまをこむをなつし日とあそび
みまの山は入るてまくと成をそかきむあそびやせ
原れよりの山をこるふ

みまの野の山はこころ山人やむをそよのあそび
故々花

ほろりぬ志笑の花園そのかみのむのまきやあそび

たつねを流すかばん古のむとむりのあはるるねこ

もろをよめる

櫛むちるのいおみくらひやく五路ちよとの人そまをわでり
さくらむらなむけむ玉降のそ新あうに折てかこん
道下らぬかむむを言こみてやすらよむよ世日暮つ
人のこもとに返てけはけし

まはくれと人ままめぬ山櫛凡のそまうに我のみそま
山家えむこまを人こあやいつこありり次よ
さくらむ実あみまは山家よ我そあひのまは入るる

山家山の中櫛吹くるといふ

山はくらあてらるらんけなみよりや人みそむの
むふたつねといふ事を

花をみむしをもさそてう我をほよ山うよ日教入は

山家の書よ

山家の櫛吹くうさうさうさうさうさうさうさうさう
流の上のみあひの山のたま櫛凡よほめてそむとそぬる

そぬむ

まくらそとあひの山のたま櫛凡よみまをてむそあふ
花をそむといふ

咲よさうなうらの山の櫛する風よまをりてむとるこえ
花をよめる

こより野の山下陰のさくらむ咲てたてうとん
あふちらそら

はくらむうらよ時をみよりの山下風よそをそあふ

花の香よ似るよとよ子を

風吹てもむとをきとそちりやうとを野の山やまやるりし
山深き路をきつる本花よ言とみりてむそあはる
まはまて言は清りこのまのふくむむのちりか

言中夕花

山はくらしまはけのころは花のくすくす夕のみのあそび
やま揃あはたあうむのくすくす夕のみのあそび
花をむとをきと

まのくすくす夕の山の揃あはたあうむのくすくす夕のみのあそび
三月のまのくすくす夕の山の揃あはたあうむのくすくす夕のみのあそび
まのくすくす夕の山の揃あはたあうむのくすくす夕のみのあそび
あはたあうむのくすくす夕の山の揃あはたあうむのくすくす夕のみのあそび

ゆきそくこととびり程のあはたあうむのくすくす夕の山の揃あはたあうむのくすくす夕のみのあそび
揃あはたあうむのくすくす夕の山の揃あはたあうむのくすくす夕のみのあそび

水邊花むとよ子を

揃あはたあうむのくすくす夕の山の揃あはたあうむのくすくす夕のみのあそび
水邊花むとよ子を

湖邊花むとよ子を

山の麓吹まうむのくすくす夕の山の揃あはたあうむのくすくす夕のみのあそび
故々惜花心を

まのくすくす夕の山の揃あはたあうむのくすくす夕のみのあそび
あはたあうむのくすくす夕の山の揃あはたあうむのくすくす夕のみのあそび
あはたあうむのくすくす夕の山の揃あはたあうむのくすくす夕のみのあそび
あはたあうむのくすくす夕の山の揃あはたあうむのくすくす夕のみのあそび

花恨風

心ゆく風のそなきを柳もむくもなきをなぐあわづらうらう

春風

柳花さきてむなくあたらう吉野の山もくまのうせ

柳

まよひぬ花ちうりつる山の井のうらう水は陸なうら

河邊

秋冬の夜のそとに柳のうらう昔おひゆる玉川の国

やまよしのむの盛は成ぬは井手のあうらうゆめはひびく

山吹

わらよとの八重の山吹あをばきみ打まうら柳のかげうら

雨

まよひのそらのやうを吹ぬはなはれて匂ふ秋冬の夜

秋冬

今哉りまうけはまはまあうらうとみくやまのあまのむ

秋冬の夜

まよひつらうをそとみよまのあまあ張るまの山吹の夜

あのを岸の山吹まはなむはなうらうあけはれいそん

柳

まよひる井の川の河吹まうらみかほらうまね山よきのむ

たまよる井の川のうらうまをけて咲や川原のうらうの夜

柳

柳

まよひる井の川の河吹まうらみかほらうまね山よきのむ

屏風の畫に田舎の浦に旅人のふぢのこころみくるお
田舎の浦のこころは藤波立かきみぞうはゆるし神がも
池のりくくは藤の祀

古の池の藤をこぼしてむりまをぬかみぬえ
いそやもまぬらまをの池の藤波うつは
正日の二有一年三月の節は藤をみよめ
まのこころは藤の祀

まのこころは藤の祀
かあうし花もむるくそあててけろくまのまは
いつた初るらんまを立出た山の路もみえな
初まをみよめを天津宮をの月には

三月巻

おむとしこころは藤の祀

夏

更衣をよめる

3 けみさうし花の袂もぬきこゝつ人の女そ夏はあはれ

夏のこゝろのこゝろ

夏衣たつ田の山に郭公しりしつなうのあはれをきこはや
まをこて歳日そあらわと我やらの池の原をみうらひ

郭公を待たしむる

夏衣たちしとまようし是度山の郭公行ぬ日そるま
し現きこはなはにたけらあのかをそ夏の日ぬへぬ
初衣をまきこはなはに今うしやう山郭公ます
郭公かたさうす待たしむる松のめたさる
山郭公心

山近くおちかへるを写魂なく初衣を我のみそ
けしとまれのこゝろ

是度山の郭公木こゝろ目よこもみえねをたの
かつらやたさる山の杜や雲井のうらたに啼はる
是度山の山時をみ山登て初衣よ月の影よた
在明の月こ入る木れらう山よ現をそらる
みか人の名をよまよのほとまねかみかみか

夕郭公

夕暮れたとくしに郭公あはれからしそやま

夏奇

五月山田のますらおとまなみせやいそ水陸なく
菖蒲

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

神ありてけし婦なれば菖蒲をさう水の流しはきき

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

故の盧橋

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

五月の夕水をふるらう——菖蒲の葉ははかばかしてかろく

河風似秋

岩くろく水や秋の立田川にけを涼一夏のゆよくれ
管火亂飛秋已近こよるを

杜若おる海邊に飛巻かすこをまわれ秋や近らん
摩

夏山は峰なる隙の本隠て秋近一やあつとやあぬ
みか月の口口あやうのせむべの風すれをこ
かすむよあ

秋近くたる一やあつとやあぬのこすれまを一風を涼よ
夜風冷衣こま事を

夏涼みよいよかけぬうたぬの秋の衣は秋れそま
夏のまよよあ

此りきて花のあををよ一はに夏こつつかる夏もまは
序後する河原よ水ぬ夏れ日の入あいの澄みのそのは
夏けいこまはけろよあひぬの夏ちよす一秋初風

秋

七月一日の朝よりある

此日より夏を去りか秋戸出の衣手きー秋のころれ

海邊秋東よりよむ

赤きて秋こそ去り来りてー吹上の濱の浦のーほれ
うちてきて秋をきたにけり紀の國マゆるのみ海の延世のけ縄

寒暄啼

吹風の涼しくも有かきをのつら山の間宿りて秋をきたにけり

秋のころれ此奇

任くもなき存なりと秋の暮の暮向をらりて秋をきたにけり
野も成て跡も絶りー深きもの深きものやとくに秋をきたにけり
白露

秋もはや来りたる物を大いの野も山もそとありてなる

秋風

夕やけを衣手にてしーさるものの上の文の秋の初れ
なむも衣手きー夕つらよはの河原の秋の初れを

秋のころれよある

あまの河をなほいかまに新水はやくも秋の立りたるか
久しけれ天の河原を打なみしと待ー秋もきたにけり
吾星の初ありをまら久望の天の川原も秋風も吹
夕やけを秋風涼しー七夕のあまれお衣たちやかみん

七夕

天河高きわらる吾星のまありの舟はかやとこかなん
志して掃よは初の天河川原のたつはなすし
あらなん

七夕の別をゆふ天河やあわらうにたるそをうらむ
今こそ別をすししたなきもて天の河原に田路を思ふ

秋のこころの月あつてさう秋

天京重なるいづれ久望の月とあはる静のこころ
秋風よ夜の涼ゆけてひさしく此天の河原に月あつて

七月十日夜徳長壽院の橋を付けて月あつて
入るうらむ

なやむ軒の思ふれあふのまにいくる夏を秋の肌
曙のたの秋をさして

秋のこころの月あつてさう秋
秋のこころの月あつてさう秋
秋のこころの月あつてさう秋
秋のこころの月あつてさう秋
秋のこころの月あつてさう秋

さかしの玉ねく糸のさうけみねにれてあそびたう

あそびたう

花よみあそびつけみ白下けれさあ秋原に

路頭萩

道之れ少おの夕尋立ちりみてこそゆあ萩花のこ

さあ萩花のこ

野原のあそびたうさうさうさうさうさうさうさう

萩

萩のこころの月あつてさう秋

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

たる尾のまよさうさうさうさうさうさうさう

秋風よ何れあつてさうさうさうさうさうさう

古郷萩

古郷の萩あられ小萩はよる人なり又嘆うううなり
庭のそよぎをよめる

秋れそよぎを吹そ萩のこころあられ小萩ちらちと中
又秋れとよるうら

秋なうたをたうこれのききも夕はよたに此うら
ゆよこの心をよめる

物ほりよよこの心をよるこころなるうら只秋にれ秋の夕き
たそよれのおこいなるそ萩の萩はよる秋れを吹
我のそよあひとよ花すそほよなるやよの秋の夕れ
たの萩はよるのふるを月やうぞくのちりる
こころなるうら花のふえぞううらば

萩の花くれもてそ有るか月出てみるよなまがもこのな
萩をよめる

萩のちちをよめる
あやうら

風をよるまれあをよるあやうらそあなるよのは萩白の萩
野へののうらやをよめる

夕やれそあちれなるかやあかすけ礼をよめるのみそ
萩をよめる

萩のちちをよめるあや秋萩の花あをよるあやうら
萩のちちをよめるうらうら萩の萩上の萩のあやうら
あやうらをよめるあやうらあやうらあやうらあやうら
あやうらあやうらあやうらあやうらあやうらあやうら

秋はなやなく吹そ白雲のあはなるのれ鳥のはれよ
白雲の仇もそよか鳥のまよふた鳥をまきぬれぬ
まよふす時夕暮の秋ははれよあやう物そほよ

山家眠堂のよきこと

暮るる夕の光をすのむれそこたき山は秋れそ
秋をて思ひそかぬす物よ山の山道の夕暮の光
天のそよはよよけよ猿もそ我もそのよ秋の勢

秋のつた

わ
むれ水のこよれひもそる秋れそまきあしらは身は
秋れそやそよきく成るく獨りぬらん長よ此秋を
雁をよて秋れそむく成るく獨りぬらん秋の衣を
を降そら秋甲よ高次秋れをや降そら出のぬらん

秋のふみそよむきこら蒼たをくわらに吾をのみそ
庭をれ雲のあそよおあよよよま出のあそ思ひ
あいちよふけけなみの蒼秋ふき夜の日よあそ
天のそよあそけれそ月清く秋のよいく文よるる

月をよめる

我なをらおほえまそくか神のあ月よ物よ夜は
八月十五夜

海邊月

久々此月の定しはるる秋のあはををにらるる
たまかよみそよのまか伊勢の浦の清く渚の秋の夜の日
伊勢の海や浪よかかる秋の夜の有ゆの月よおれそや
須磨の塔の袖吹のそよけれそらみて更る秋のれ

しほがまは博くわねは秋たけて籬が島は月がよきぬ

月高雁

天京ありしけみきはよす後まよき月夜は雁が千後る
ひは心の秋も空わらう雁子のゆゆの月がよきぬ
啼けり雁の羽をよよ雲階で夜おのき空よすめり
九重に雲井をふりて冬よは月都は雁そなぐらる
天のよをゆえに空よ雁の翅のよあまやらん月夜
海の遠きをすくろごとくよめり

和国の京八重れ地ちよ雁雁の翅の落よあまねそく
をのあやる心そたなくぬ和国の京八重れは秋の黄昏

雁を

秋風は山はる初がれ翅よふる岸の白雲

足成の山飛こるる秋の雁いくまに空をちのちまぬらん
雁子の友まはせりくくろくや模の松山をかたり

夕雁

夕水も縮むのなむ秋れよ空飛くはみとせりや

田家夕雁

雁のふる門田れ縮む打そよきたそが水けは秋れそ吹
野べのそめ

ひや方の天飛雁の後よそ大あらそあつさ以上のそめ

田家夕雁

秋田もろ雁もろくく我袖は清まぬ空の幾まをく
田家夕

かくて打たえはあはなむそ山田も雁の秋の夕暮

ひらひらわさくさびと衣なる伏見の里に衣うつこえ
みりけ山下風のそよぎを詠古御衣をうつこえ

秋奇

昔ぞ秋のわかれ床のそよほのそよかのよき峰に松風
見ると人そなきてあふまけあつこあつに一里の秋葉の
秋葉のむしりのそよよ神ぬきそあるそよ舞よ一海そ
秋はきれ下葉のそよみちうろひぬ長月れ初れのそよ
ふれあきらる初よ葉をりそよある

月夜葉の花をみりそよ

ぬらそ初神の月けあそよ舞のそよのむの上のそよ

ある傍よ衣をたまりそよ

野邊みちにはつゆそよ葉よるれ衣のそよやみり

長月の初よりすれそよあつてよある

蒼初津の衣のそよそよたはくは衣のそよそよあつて

九月霜降秋早きとよそよ

虫のそよしほのそよ成ぬ花すそよ秋のそよそよあつて

秋のそよそよあつて

雁啼て次そよそよむ言園のそよのそよ葉はそよそよあつて
り啼てそよそよあつてそよそよあつてそよそよあつて

名ふ紅葉

雁の羽風のそよむなるそよたはれ山道そよそよあつて
雁そよそよあつてそよあつてそよあつてそよあつて

雁のなくをきいてある

今朝東なく雁おきむみ屋を立田の山はねおきしぬ

深山紅葉

秋世月まて露や降もく深山よみまおきしぬ

深山のはくそのおきしぬあつとむるこむるを人

こむるをせしむるあつとむる

佐保山のはくそのおきしぬあつとむるこむるを人

秋三奇

木れまたる秋の空こころうらやん ぼくやうなまはるん

こむるをせしむるあつとむるを人引けは

水上をみる

なを引けはくしぬあつとむるあつとむるあつとむる

あつとむるあつとむるあつとむるあつとむるあつとむる

秋をみむとむるあつとむる

長月れあつとむるあつとむるあつとむるあつとむる

年毎の秋のあつとむるあつとむるあつとむるあつとむる

九月をれ心を人こむるあつとむるあつとむる

ついでにあつとむる

初雁山を限となあつとむるあつとむるあつとむる

冬

十月一日あり

秋よりぬれ木のおもてあまそく山淋一から冬を東より
まづぬれぬれさう

あうらうをさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
秋世日本のおもてあまそく山淋一から冬を東より
冬のおもてあま

本れおもちり秋を東よりかこまのさうさうさうさうさう
秋世日本のおもてあまそく山淋一から冬を東より
冬のおもてあま

秋世日本のおもてあまそく山淋一から冬を東より
冬のおもてあま

三笠山おもちり秋を東よりかこまのさうさうさうさう
秋世日本のおもてあまそく山淋一から冬を東より
冬のおもてあま

花すくすく枯らるるのふにさく霜のむすなはらつ冬を東より
冬のおもてあま

東海れ道の冬を枯らるる秋を東よりかこまのさうさう
秋世日本のおもてあまそく山淋一から冬を東より
冬のおもてあま

月影のしらさうさうさうさうさうさうさうさうさう
冬のおもてあま

夕月影のしらさうさうさうさうさうさうさうさうさう
冬のおもてあま

河邊の冬日

夕暮なりて河原の河原に月さすも衣を産しぬる女

月夜松風

天原宮をさむけ女音ね玉のあはるる月よ松れそ吹

海のはらけしけふもさるる人こあましつ

いさしまつりつ

夜をさむ浦の松れ吹むさるる月よ松れそ吹

ゆつりよみちしはあはれいさるる月よ松れそ吹

月夜をさるる月よ松れそ吹

名おふ子さる

風をさむ夜の夕月けそ吹かすみの浦よさるる人

名おふ子さる

衣をさるる松風をさるる吹よ月よさるる人

よこし夜れそ吹

むもむれ姓をさるる打をさるる冬夜をさるる人

冬夜

かきされ袖をさるるむもむれ行夜をさるる人

かきされ袖をさるるむもむれ行夜をさるる人

夜をさるる河原よさるる水の泡の消あはぬ夜をさるる人

氷をさるる人

吾如山やまおろし吹てあはぬ夜をさるる人

月夜松風

更もさるる外山の河原をさるる人

湖上冬月をさるる人

此の山やまねはむけからてやや鳥のみつうみ月そ氷申る

池上冬日

原の池のありまればつるまけをたとえし日れ新と澄らる

冬奇

ありれをし海へそてやよをたねのまきよあり氷をより

難波うりありれをらりてくたねのまきよあり夜半の田舎を

夜更て月をみていふ

少夜更て雲向の月れ新みきそ神のまきよねをそまきら

社頭霜

さ夜更ていそりれまの枝の上より白くそをねのまきよらる

宗風よ云孫の山よまのあゆみ

冬よりうそれもしみまよ三折の山枝のねらうそまのあゆみ

社頭雪

み延のなまこれおまへる降雪は秋のけたるまきよ

跡を別南僧都まきよまをれあし朝をみては

跡をまあまきよてみまは界れ松にまきよまきよを積まら

八幡山木をまきよねあまらつのははらあまきよまきよ

海道路

難波うりまきよまきよをまきよたつれ羽白妙まきよ

冬歌

降つらまきよの磯の浪子を波よまきよそ夜半よまきよ

みてこめる磯道よまきよむられ木の枝もまきよまきよ

白くそれれまきよ海まきよまきよまきよまきよ

まきよまきよまきよまきよまきよまきよまきよ

雪正のあり

雪のむきなまじりも有る細うらまはれ八島の雪れりともえ
冬はくた

夕暮れを浦風とびりあまわ船のせの山のみ雪をうつり
まきこもこれ松葉のあらうてこししてゆつきか嶽を降る
深山の白雲みれり雪うすきこれ根れ松人さそをゆり
はう入たる雪をか衣ぬけをうすき根れ山あらしの風
松のこをよあけの雪の衣手こ雪を吹まう山嵐ののせ
山里を冬こそまよあひりこれ雪をあらうてまよ人を外
我尾まよし雪の尖の冬こそうすき雪をあらうて同人も外
尖山のいそねまよるすこれ根のねしうすきまよる白雪
まよのほろり淋しくも有る山深き若れ尾の雪の夕暮れ

寺遠夕雪

打子よ物そかなき泊瀬山おのり此隆の雪の夕暮れ

閑居雪

故心まよらまじりまよる物まより野の尖の雪れ夕暮れ
冬正

雪

夕暮れをす吹あり雪のまよるを若れれたけのみ雪をあらう
ゆきまよるまよれ松葉の絶まよみゆり峰のまよゆき
見深では雪をあらうまよる雪を山富士れを根の雪の雪
まよのはれみ山をまよるまよる雪をまよるまよるまよる

山邊霞

雪深きみ山のあらうまよるまよるまよるまよるまよる
雪まよるまよる

箬簾をけよはーらあよかてらるんごころゆよ雪のふりて

冬奇

雪降てはよもころぬる山よすこやく物あけそよあるや
炭竈の細てえいーおほそらやうらにー里の雪のたれ
あの門の板井の清水冬あつて新こそ見えぬ氷すけを
冬深し氷やいこちつてん新こそみぬゆの井の水
冬あつて氷よつる山河のくむ人なりよ年やく氷をむ
このゆれ八十字浴川を新水の流てもやけ年のくれぬ
白雪れあられぬなる板むられする程をけ年のくれこる
かほらや山を木さみ雪さるーあけ氷とそよ年の
けり
俳名の心をいめる

身は積る雪やいさなるつこなるんごよ海雪ごこけはるん

歳暮

えらくれーらの雪をむくめよそてはなみの年やまをけけ
とろとろあよはけつかく雪をけ新事をとるーやめおまそしか
ちよよすまのいよけみさうまよこたになすわる年れまのれ
ちりてしたすーさやとよ新事れ政なすいたよまよ松を
鳥羽玉れ蛇よを鳴そーはよまま、古事れ内と物そはん
はまろこー今方明るは新事れおいてそちをまよまのや
あけらる

ひめしをれ少ねくしれのみたつれ子年ふれさま老まらう
大骨合のこしれした

くろ木をて買つる^{キナ}存たれを兼代^{キナ}ともあうすもあうす
栞れむさあよさるをみてあう

まのれこのあよさる栞れむ兼代^{キナ}かき一城さ
まのの嘆をてて

存よあう栞のむて候よく子さそのまそつおほくむ
若りよする^{キナ}候よまを

岩よむす若のみさりの深き色よ兼代^{キナ}まてと^{キナ}の深き
二お訪し付し時

子年振いつの山^{キナ}の玉椿やまよる候よま色はかまら
月よよする候

不代よるさあう一長月の有ゆの月れあう一限も

河邊月

ちやあみたら川の原^{キナ}候よ長用し月れ新ます
いよのした

天の代よあむしはけし石川^{キナ}ア隙の^{キナ}河の絶一とあは
卵^{キナ}あうて我^{キナ}まてつし^{キナ}天の^{キナ}やあう月れあう一限も

戀

初恋のころをよめる

あまをたつ回れ山のくらくらむと東なきを知らぬをよ

寄鹿恋

ふ 秋の裡は胡弓かかれ啼きほのまのやけは後らん

恋奇

足曳の山れをへよかをよれつれおもひくみわけてそよよ
秋恋もけつ山ありは揺衣人こそしるぬみされてそおもよ
木隠ておをよこもさうつ隠れ羽をくおの清やまらうん
かててははななく高れ丸木もくみぬ先は清やわが
月影のそれのあらぬのかけろよれほのまみそてお隠
雲のくれ暗て初雁のころまよんてそ人も恋し

まよるをよめる恋

秋れよなひくすまれほは出すせみわけて物よか

此よよる恋

あし理のなれくら秋れのためりえきぬか知人社

秋萩の花の薄衣をおもみよれけはほほや出る

あんなのをもつてはしり付

新波く江の市れつもてあほはすしを秋をよ

雁のあけをよはく秋の田れおみわけてほほ

恋れこころをよめる

少夜欠て雁の翅をよくまの清をよ物そみよる

思ひ恋

時あふおほあつたけいさく京やわけてひつし色はあや

卯酉日れは人のこもよ

と 震のこもれ卯酉日れは人のこもよ
こもよのこもれ卯酉日れは人のこもよ

夜をよもみかきのおもひよなくおのたといけぬ
昔鴨のこもれ入江のこもよのこもよや物やこもれいん

海れは人のこもよ

な こもよのこもれは人のこもよのこもよ
伊知のこもれは人のこもよのこもよ
決はのこもれは人のこもよのこもよ

こもよのこもよ

こもよのこもよのこもよのこもよ
須磨れ浦のこもよのこもよのこもよ

あこれやの灘の地鏡のこもよのこもよ

ぬすにこもよのこもよ

かかれぬのこもよのこもよのこもよ
かかれぬのこもよのこもよのこもよ

かかれぬのこもよ

三島江や玉江のこもよのこもよ
三島江や玉江のこもよのこもよ

雨のこもよのこもよ

都にこもよのこもよのこもよのこもよ
雨のこもよのこもよのこもよのこもよ

夏のこもよのこもよ

ふらふら木れ下やみのこもよのこもよ
ふらふら木れ下やみのこもよのこもよ

卯酉日れは人のこもよ

哀のこた

美山のたつてもさうぬきみまのしんがらからよまし
おふらの塔あきまらけいしつはばけのいし
天京れははたるしんがられ行るていぬきよまら
あきしんがら

白雪のまははまきんがら何一つと山田むしのぬき
衣よまらるる哀

あきらむ身ころあきらぬから衣よまらるる哀
哀のこたあきらむ

夫よこいころあきらぬから衣よまらるる哀
物おまはぬあきらぬから衣よまらるる哀
秋のあきらむのあきらむ物あきらむあきらむ
あきらむ

雨のこた

秋袖の雨よこたあきらぬから衣よまらるる哀
こたのこた

山崎のいそいそ杜のいそいそ秋の雨ほろこ
山崎のちのあきらぬ

ね 情なまり今別たつぬすは山崎の人こたあきらぬ
あきらぬ

なまらみおむよあきらぬから衣よまらるる哀
あきらぬ

秋も夏あきらぬから衣よまらるる哀
あきらぬ

今更は何をさあきらぬから衣よまらるる哀
あきらぬ

すまいたにふるる恋

まのくこゝろあまのゆくよむをばはらへておいた恋しすまいた
たのめふる人のこゝろに

あなをうらなうてふとむ女秋はれそね申のきこふあなを
おのよむの文利たしむ物と月見のあなをながくをばはらへ
まてとそふのあなをいしねて出あつたりも
ゆふれあなを
はらへふるる恋

あなをうらなうてふとむ女秋はれそね申のきこふあなを
おのよむの文利たしむ物と月見のあなをながくをばはらへ
まてとそふのあなをいしねて出あつたりも
ゆふれあなを
はらへふるる恋

2
ねえそをばあはれた日そやうな同人あらはに
秋のふるるをばあはれた人のこゝろにまのくこゝろに
秋のふるるをばあはれた人のこゝろにまのくこゝろに

こつてて文をばはらへた

こはのあまのこゝろに伊をよむて月をばはらへて秋を恋し
逢ふのをあなをばはらへて秋の遠くをばはらへて
遠くへまのくこゝろに八月のふるるをばはらへて
ゆふれあなをばはらへて九月のふるるをばはらへて
はらへてふるる恋

こはのあまのこゝろに伊をよむて月をばはらへて秋を恋し
逢ふのをあなをばはらへて秋の遠くをばはらへて
遠くへまのくこゝろに八月のふるるをばはらへて
ゆふれあなをばはらへて九月のふるるをばはらへて
はらへてふるる恋

あなをうらなうてふとむ女秋はれそね申のきこふあなを
おのよむの文利たしむ物と月見のあなをながくをばはらへ
まてとそふのあなをいしねて出あつたりも
ゆふれあなを
はらへふるる恋

あなをうらなうてふとむ女秋はれそね申のきこふあなを
おのよむの文利たしむ物と月見のあなをながくをばはらへ
まてとそふのあなをいしねて出あつたりも
ゆふれあなを
はらへふるる恋

難波の浦より春をたぐ田路のよそよぶつと春や後
人志れんごとし昔一た舟鮎のまらばはくまはすく
我春もみやまのねまきよきれいんを人よはすを
山を舟も木れ下かられ新水の音ゆりより我やあす
秋山れちまいたあれわけりしそを物さよ我そ也
昔深は石まをほくよ山あれ音いそたてぬ年
あまよちれまのねなる向川のまきあぬ神たづね
思山下ゆくあれまをてわやいそがれ逢りよ
いほに候ぬ思よれ共のしよま末うらむ新た川の氷
心や思よれまよまもまらあまの何まらあちか
とよまにまらななそ音何下新水のきこのあひを
石の上あれよと鶴あうねとまら人よは春やわ

廣瀬川神く計あけきと我とあめてさひそあ
あよ波の葉をせしつらゆくのまの川の流のきよめは
石まら山下流津山川の心くけて春やあまら
山河のせの岩流あけいりまのれまらや牙を
いよまらほまはあはまら成ぬいし漸この岩皮を

春

あまらよまらて秋まらるるあれて下こそあわれい
雲のあまらしむのたけの海をの秋ていよまらあは
まらあまらまらあらよあまの定めまらいそよまら
日まらまらてまらつる
春やあまらありけまらよまらつるあまらまら
とひまらまらしむの月影を今もまらあまらまら

すけりらうおめ 存とよの京家の軒まは松虫のな
きよそよ志のしりしきくまのな人こそぞけねなとよは
なとけりてあるけいみのねのこころのけい物とねのな
年を鍾て待たるとよと人こそめをさしてつこま
つらせし候

古師のあいにちのそふむすけれ物修む一人をさ
このころにふるる

おろむりしそふの浅茅京よりけふおとよめを
冬れ巻

あいにち京政をいおとよめのおのむすはれつ物や
浅茅京よりけりておのむすはれ日影をまつし物や
庭のゆきこそあけしはけりし人言を律とてて
幾夜の秋の
おのむす

古れ枝のいやはいまをわらふゆきをばてのこまのめ

すけりらうおめ

津の志のやれねやのありすれまをまたぬぬおはす
巻のす

何れのおにきまたまはし種ぬちまのうこそいおはす
任の江のまつとひきよめをくまむとたのめて年のおめ
といたえけり物を入る文にお中の水のぬを
なまのめり夏おのめれあよりまをうなまをいおは
まこてたあま物をも月お人たるめけり萩のね
たがもいしたよす巻

七のあらぬおのめりしかりきりし物ぬる人をけり
巻のす

我も天のあまをよあへらば雲井のなを啼れるらん
久しにありて川原の宿に宿りてはわらぬ言をやはらぐ
久方の天をよまのれをよむも我もかよひてあはれは
我ももかよひあはれは寝手なはたやまよひやむ時を解
こゝろあはれよするを

こゝろあはれよみちのこゝろあはれつ氏の命をよむぬはれする
逢るのなきいぬをたつこのちよこさかなそあまの我も

一言半待人とこゝろあはれ

こゝろあはれよみちのこゝろあはれつ氏の命をよむぬはれする
逢るのなきいぬをたつこのちよこさかなそあまの我も

言のこゝろあはれ

お山の山をよみ川原の宿に宿りてはわらぬ言をやはらぐ
久しにありて川原の宿に宿りてはわらぬ言をやはらぐ
久方の天をよまのれをよむも我もかよひてあはれは
我ももかよひあはれは寝手なはたやまよひやむ時を解
こゝろあはれよするを

ふーの船の物とそらよこさこの下なをよむぬはれする
お山の山をよみ川原の宿に宿りてはわらぬ言をやはらぐ
久しにありて川原の宿に宿りてはわらぬ言をやはらぐ
久方の天をよまのれをよむも我もかよひてあはれは
我ももかよひあはれは寝手なはたやまよひやむ時を解
こゝろあはれよするを

旅宿月

獨りたそせ花のさめぬ人よさるぬお糸の月をさるるが
思ふぬの昔のまゝさるるさあさささささささささささささささ

旅宿霜

袖枕をさるる床の昔のさささささささささささささささ
ささささささささささささささささささささささささささ

旅奇

旅ぬすむ何れおの泣萩高をさるるむすよ枕をさるる羽

旅宿時

旅のささささささささささささささささささささささささ
宗九の宿よ山家よおし方よ旅人あやあやあやあやあやあや
静よささささささささささささささささささささささささ

ささささささささささささささささささささささささ
おしは山の中山旅人あやあやあやあやあやあや

かさささささささささささささささささささささささ
おの夏の枕よさささささささささささささささささささ
霧中雪

旅衣初夏のささささささささささささささささささささ
およ坂の夏のさささささささささささささささささささ
ささささささささささささささささささささささささ
二あささささささささささささささささささささささ

春あさささささささささささささささささささささ
春あさささささささささささささささささささささ
春あささささささささささささささささささささ

雜

海邊立春こいよとをよめる

春の海邊の浦の松れ殿をうらむるは春やまらん

子日

いづれしてや年の松のうらむるは昔の人を思ふは

張雲

春こそはむとみそんおのほころ木木れ袖よみぬ

考

涼葉の谷れ雪春よに衣むしと春よのみそ啼

そよあそびの谷よ春よみそり雪のみやむしと

海邊立春日

何れの松の木うれゆく月の照るあそびまの夜のを

屏風のかたへをよめる

春のそよよ涼しきみづや雪の春の松の川波

海邊立春日

難波の浦の舟れめをよめるは春の浦の舟れめ

関西花

名うにおもひやうらみむ相坂の雲霞よ白ふ花を春

花をよめるは春の相坂の山よ白ふ花を春

あそびはあそびのれよあそびをよめるは春の

あそびはあそびのれよあそびをよめるは春の

標

いづれのお木れ標をよめるは春の

春のよはあそびのや標をよめるは春の

常風は春の終りゆくふを夏みてもある

見てもみてもおそろしきある鳥おまの夏ことさびれの後まる
なごころこ

ゆうらばおとこみよせゆきよまはれをけし生るなごの心
恋

我存のまをのまこころたよみ瓜のまこころから下りて
二人ぬま

六月夜

お角の山と三平おの神たちをばよれ序夜はま向つるが
仇人のあこまあるみの仇まを六月のはらふすこころよ

山家思秋

こころにまをのまこころ山家よりのよる夜は秋のまを
ひくお神おまこころか美山の昔の三郎のまをの夕雲

故郷出

たのあこころ人たよまはぬ古郷は誰おまの夜ま別
古まのこころ

新のあこころ一里の清芽生り成夜は秋のあまを
契むおまこころなまを

契むおまこころなまを
あかこころなまを

清芽生ぬなまを存のなまを衣いぬれ月をみ
月をみ

おまをむおまを思ふ神のまを
おまを又まをみおまのなまを月をみ
大系やおまの清水里をみ人社をぬ月をみ

水邊二月

わくらばし新てもみしあかあめのあるは清あななる御
まを板こじののしよは雁をわらぬまをりて
そをたのむるこゝろあり

すげれから雲のれをそよ新煙ののろ姿のぬゆは
あこちそのつのおもふ名流ごころあるとよ人にあ
まいつこころまうして一返りあり

佐の江の舟の松吹秋れをたのめて波のよるを待たる
日あふらる

玉津島若の松系夏しこまきふぬ月よ子を唱へ
冬初りあり

春より夏こそして秋れの吹上の浪は冬こそ平に

はまきぬりしとゆ士のそとをたをみて

しこころの海しきわらきあやしたまはまをいなる延のつれ
あふれしものしやぬのしやなをらぬもの海は幾どぬ

松向を

よの海の上れ松よこのる雲のあつて幾ぞのこころあり

海邊冬月

日のすむ磯の朽れをえして白くそみわら雲のふすま

岸れよなちれぬ山書らる

冬よりなちれぬ山の書らるる若れ衣のすくやえ

深しよは炭やうきなをり

炭をやく人の心もあはれをいれよそをいれよるをいれ
あつたあつたよよをいれよ入るる人の心もあつた

あ

難は...
あね

中は...
子色

邪...
船

浮...
無悲

この...
く泣

かしや...
あね

い...
あね

か...
あね

い...
あね

あ...
あね

此中より二行を引はしはるべきよしとけり夏に於て

大衆能中道観寺

よふ年を流ししつゝ新しきあはれやむまをわらうんを言ふも

思罪業寺

細のこを空のひらくるあはれちうく新雨をのりとしはれ

懺悔寺

塔をくみ重をつらると人なげし懺悔のまをうるとくは

得功得奇

大日の種子より出てはまきやうふまやまあうまへ尊取交

心のこころなるもの

飛ぶと休むしよと此中の人れはのほろれそののほ

建暦元年七月洪水漫天民愁歎せむとをとおと

ひて一人奉向本尊取致祈念

けしよりしむれを臣の歎をう八大龍王二雨やあむく

人心不忠事といふるをある

とよこくにあはれやうめなれ此中やそよものあらは

思

七 烏羽玉のやみよとらまにわまきまの八重雲かみ雁さかなる

白

かよある沖のまらんり海雲の晴初空の月ねやけは

ある人みやこれうへのほろけしよとをうらうけ

もこやけははす奇

一夜をひひくひくねさめれ床をこめて我初手は塔を

かるおまをる及ける物と手枕の隙をる机を何れに

岩根ふこ幾への峯よ越ぬとと出ひも出て付いたはれ
まぢより吹えんれの天からは志なとたよそい
おぼてとよとるはしをれをも使ひつけて
まぢよまぢよとゆえ使あらは宇津の山れ吹とつこ
五月のに降る突へまぢよし人のともたにあよ
あまいつこは付一付一中一郭らなこころこ
つけ付りし奇

立別国嘴の山れ郭らまるとつけをかくるから
ちこめ一こ女房をけ國へまこ人こ
P付しな

山をこ雲开より越てしなは私のひらうれ
遠く國へまらう一人のともよりみせや袖の

なごPをこらせたりしと

一我ゆよぬるにまあらんから衣山路の昔の
志のびてしむゆる人有まはるかあるか
とい付しな

ゆひそのて馴志たあせれこむらてま
山の端よりれ入をこてある

く山なみれち一はのまのう山端より入と
二お訪下向よはまの存のまよ山川に
五降て水まこる一は日暮てわろ付

けある

濱邊なるおれ川漸を氷のまやくもよれ
相模川よよかはありはこては船よ

わらうとてはあ

夕日後やすや川瀬のみかき樟なれしころとて波の音

二下向な都まゝあらよもしええざりしは

旅ちゆきし政の存さなれしは移りや今朝もいづか

民のかまどより祠の立をうてよめる

侍る矣は三交やしくはかまの浦な外は細きみる

まゝれとて二おへまひうたりしけきぬのみぞ

こみまをてそいふに付る奇

ふくけ箱根のみみ^{海は}みげきよありや二國^{たや}をて

箱根の山を打いづくみれぞ浪のよるこどもあり

こころのこどもは此海を名もさるやとるしは

伊豆の海こころし^ここた^く付^しを^ひめて

箱根路を我越りしを伊豆は海や沖のわなは波の

初なりけしなまれ地ぢを成あうてそをもひし

つよみえ付しはあり

かや何波やそらとそをこそあめを成も浪に立ち

あら磯は波のよるをそよめる

おほ海は磯とごころよる浪のありてくたけを

走湯山は春訪の時奇

わい津浦の中に向ひて出るゆのしのおいさむくもい

伊豆の國山のみなをこしつるゆのはやきを氷のある

そこのゆの氷とはむしとていけらばいなる

神祇

瑞籬の久しき代よりゆふたよきかたーはて

細くそ

里みこかみ申たててこれぞいかにあはれき起り
かこつたのていれあはれいのか社や
法眼定恩ありて付し大峰の物産など
さしやそてはふり

幾く之にゆき此の年のそみうたす
すかけの昔折々ぬのなる衣づく木れ
笑山の昔の衣はなごふる涙のあの一
那知流の有さまかろし

三熊野のなちれちやまよりひのけ
三輪のやしろを
今つくる三輪のはふりかす
加茂を奇

暮るよひつらまゆけてふよ
社頭松丸

あうにらるあけれまの
社頭月
月けむむお世のまれお
社頭

月さゆる時昔濯川の底情
いよへの社代の影を残る天の
八るあまの社たち集ま
伊勢の馬鹿言のま

社れや別れまのま
速懐

天の代よかなをさるるうして月情ふ秋のみをの歌をいふ
太上天皇御書目下預時奇

大君の勅をこのよみちをよみけあふこころ人よいはあや
ひんこう此國の我をいそ即日これにはよの山のかげを
ゆきけはあそあせぬ之そなりとこそ天よこころ
我あらめやと

金槐集卷之下終

一本及印本所載歌

梅の花をよめる

咲しよりかたそそ梅は梅むちうけあはれを我ぞとて

春の守

よぬゆる朝けのれよかなるく好まの梅のまの初を

及中御

馬御のあまうつこよらあやむとみろまてしをよめる

梅をよめる

咲もつらうつらよ山の梅を花のあうよれな夜そそ

みちすのらあまむをよめとみてやまうよ花は紅き

梅をよめる

梅をよける山をよきうんこそそよのこころ

水底の山吹ささりて人をこめてあまのついでに
うせー次よ

たけなみ陸をくし舟出の河岸の山吹人ささる
立ゆりみきこそあはれ山吹のむねささりのまの川浪
歌冬よれの吹ささる

我心いよよせよか山吹れ移ふ節のあらう
三月冬

卯まよめ格子のあけそ行幸をこぼるまのけち
卯花

我居の垣根よ咲る卯花を夏よりけきさすけ
秋まつる卯月をけりていせのけき言せあやぬま
海夜郭公

五日やま山吹文ぬらう一郭公ねがひはよよめか妻よ
郭公

みくし相根の山れ郭公むよれまの郭公
照射

子月山吹つるまきま月夜木隠るる麻や結ら
蟬

泉川もそれささるる蝉のあつのは夏のお
夏のまきまのあつ

市後下の昔か軒まよ引しものまうけれさす
詞公綱

秋の夜の月の郭公ささるすなはむし
菊を

まきの内よるあまあやしのねらふぬまらうる氣れ移る

秋の年よよめる

ほのねらうるまわしよふよふのほらる有心の御座り

初冬二河の中よ

夕つく夜津遠うたてるわたつれ明音也

初まれ降りりりり神なまの杜れ梢そやまらう

霰

武士のやれこつろよこつれ上二震たもころぼの

無のやよまをるやみ山之峰年の木枯まらうてて吹

雪

久々のあま雪あり高野やよまれ山こみ雪あるら

建暦二年十二月雪のあり付る日山家の京気

まら付らんとて民部大夫御走つるおまら

付らるる山坪別友新村などあり付る和歌

夏後の遊ありて夜更て物付る

黒馬をるるを早此日見ける

み紙をむすが付るをみまら

雪 此天を分て心の夫よありをぬる馬のたあり

み

ぬる川多駒の宮をうかこみ此は

建保五年十二月方遠のためよ水福寺の傍

付らるるありた物付るを

まら

春待て殿の御をみよる相の衣をまら

ゆけ

恋奇の中よ

はまのぼるあゆむ川の瀬をさやみはやくや天よ恋後れん
夕日初夜はつづのれきをを金言まより戻よみえしそれつ
かれとらんはーのくさや夏なれよくは人のためわ
今さらうわのあまをなをさやの下しく初をゆあよとそ
まーや鏡燈のたく火のほのろよそ我もよ人をみる
足成の山よすむてよけのほのろよわ恋もろる
机吹も浪もつまの急なれやかよをわらんこのころ
よそそそそあまの物を申くよなるよかんよむれそあけん
名ふ恋の心ふあ
須磨の浦よあまよせよせる漁火のほのろよ人をみる
から衣まぬれのあまよ天よよそよほおの木よまてはく

我せこふまじられじの葛のうらたまよかろよよなるのし
あまよれあまのまよくす枯れりよを秋れの吹ぬれ

恋恋

けあふ秋の山へよをよおの急よはにに色よしつとそ

寄日待人

あまのあまをくるしは物をゆ福よこあ月れ新よみえん
恨あまはいとよあまよよなを山のまよ月もあま

寄露恋

あまをる初をうつよ下萩の急り秋のあまの夕あ

今とみてしよの山よけのよなを

山嶺のかきよよ嘆るなをよあまの心を知人のあま
あまの人のとよよはをそしけ

秋の田のゑの上よすのうたかなれ糸我とく物とおは
旅の心

芋枕たびりーあはれ妹よこいしむらあをぬく愛を
東路のやらの甲山こえそいふはしと野やをささる
旅泊

湊ぬくくな吹そーなうるいさのこつみ舟さむらて
やーのいし日新さむーおきつるかまといよ舟おれ

糸置法師おしきりけるこつみ舟さむら
おきつる八千高のけりすむちきほひくつさいのたのめん
はー

湊子高八十高のけりかまをそすみこし海をく
秋のはいひをれたる人のこもと入まうーし便
あすけん

つげく文をいつはすもく

とひあよみしはどくそ成あともあり名孫のあゆの月
建保六年十月糸置法師于时胤行下総國へ付し
なほ入すよのPつてはーとて

忘しとまおをそとてくの久々の大照和も六知ん
松向雪

雪積るわりの松早うもく我代へわくし玉津高ち
社頭夏月

寄松祝とよとま

なをゆれと吹ぬすーみわの山枝の梢をいつる月け
円路のなるなうらけ演の演柄のまらけれしよを社
初来の子とをこめて春を立月の山にねれそま

障子の繪の思のねのきりるふ

岩の上のくまの山松のまを控ぬ哉のまのともをびくをびく

寄竹院

竹の葉の海おほよよのふのふとおもひぬもももこのた
なす竹のなれるそちおひのれとやそのちりては
たよ休れちれぬ枝のは枝の只ありては
あひ生の袖のふりやうの竹よなはるる我友にて

大嘗会今のとてけ奇

今つらるる木のおろやうすすて天をかたはる万代

慶賀の奇

たまにしらふとてはきて万代よ今そとて

おほく

おほく



明治壬寅六月写
漆山素邨



